SUAC研究の「いま」
Research Introduction

研究紹介 02

北遠地域に伝わる祭祀芸能の総合的研究

■ 文化政策学部 国際文化学科 教授／二本松康宏（研究代表者）
■ 文化政策学部 芸術文化学科 准教授／田中裕二
■ 文化政策学部 国際文化学科 教授／西田かほる
■ 文化政策学部 芸術文化学科 教授／奥中康人
■ 文化政策学部 国際文化学科 客員研究員（当時）／宮嶋隆輔

浜松市天竜区横山町は、かつて天竜川水運の川湊として繁栄しました。川を下る船頭や筏師、木材の買い付けに訪れる材木商、そして遠州と信州を往来する商人たち。天竜・二俣から水窪を経て信州へいたる秋葉街道（信州往還）と三河の鳳来寺と遠州の秋葉神社とを結ぶ秋葉街道（鳳来寺道）。二つの秋葉街道が横山で繋がります。

そうした賑わいと豊かさのなかで、横山八幡神社には正月の祭礼と芸能が伝えられてきました。江戸時代後期に内山真龍が著した『遠江国風土記伝』によれば、神事は正月元日から十日まで、あるいは二日から十五日まで及んだとも記録されています。

◀南信州・坂部の冬まつりの実演披露（本学講堂）

しかし、明治七年（一八七四）、その祭礼は忽然と廃絶してしまいました。祭礼の芸能に使用されたと考えられる十一枚の面とわずかな祭具だけを残して。

令和五年十一月、浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会と浜松市文化財課のご協力をいただき、内山真龍資料館に寄託されていた十一の面と祭具を静岡文化芸術大学で展示・公開しました。もちろんただ展示するだけではありません。かつての横山で催されていた正月の神事とはどのようなものだったのか？明治七年に祭礼が廃絶した背景とは？私たちは、展示を通して横山に伝わった「まぼろしの祝祭」の解明に挑みました。

◀仮面の展示（本学ギャラリー）

面の学術的考証を担当したのは当時、本学の客員研究員だった宮嶋隆輔氏です。宮嶋氏は横山八幡神社の十一の面を近隣の「懐山おくない」「神沢おくない」「西浦田楽」などで使用されている面と比較することで、その用途（演目）を推考しました。たとえば、これまで「うそふき」と呼ばれていた面は、実は「鬼神面（吽）」に対して表裏に位置する「もどき」であることがわかりました。鬼神の厳めしさが魔を鎮め、その「もどき」が面白おかしく戯れの笑いを誘います。笑いもまた邪気を祓うのです。

明治元年（一八六八）に新政府が発した神仏分離令は、まもなく廃仏毀釈という過激な運動へと展開しました。その暴風は北遠にも吹き荒れます。明治七年、横山八幡神社（熊野権現社）に祀られていた仏像が社殿から撤去されることになりました。正月の神遊び（田遊び）が廃されたのもこのときです。

ところが、私たちが調査を進めるなかで、横山の宝珠院の観音堂に祀られる十一面観世音菩薩像が、なんとかつての熊野権現社の本尊だったことが判明しました。明治一三年（一八八〇）に記録された『宝珠院明細帳』によれば、明治七年の神仏分離に際して、熊野権現社の本尊である十一面観音像を宝珠院に移し、境内に仮堂を建てて奉祀したといいます。村人たちは、表向きには廃仏に従いながら、「古来当村氏神の本地仏」（『宝珠院明細帳』）を密かに匿ったのです。

その宝珠院の観音堂では毎年一月五日に法要が営まれます。本来、観音の縁日は十八日と決まっています。宝珠院における一月五日の観音の法要は、おそらくかつての熊野権現社で催されていた正月の祝祭の記憶に違いありません。

一方、横山八幡神社にもかつての正月の祝祭の記憶は受け継がれていました。一月七日に執り行われる湯立て神事もまた、おそらくは正月の祝祭の一部を伝えるものと考えられます。神と仏の共生を密かに守り伝えてきた横山の人々のしなやかな心意気が伝わってきます。

◀「まぼろしの祝祭！天竜横山の神遊び！」開催案内